



(高砂)

坂元遺跡は、加古川の東約1kmの沖積地及び段丘面に立地する。縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡であるが、遺跡の中心は奈良時代である。遺跡の南側には古代の山陽道が通っており、山陽道に面していることが遺跡の大きな特徴である。南東40mには賀古駅家に比定されている古大内遺跡が所在

兵庫・坂元遺跡

- 1 所在地 兵庫県加古川市野口町坂元
- 2 調査期間 二〇〇四年(平16)八月～二〇〇五年九月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 4 調査担当者 岡田章一・渡辺 昇・西口圭介・山上雅弘・長濱誠司・鐵 英記
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

する。

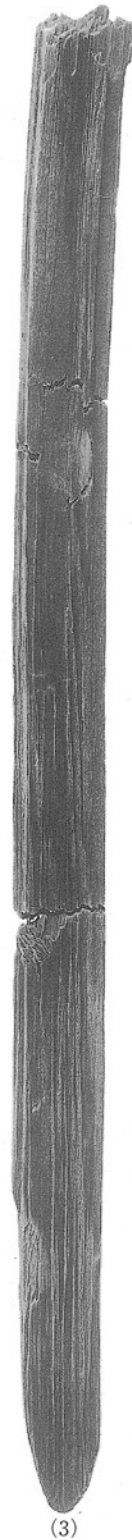
調査の結果、奈良時代以前では縄文晩期の埋甕と弥生時代中期後半の方形周溝墓・堅穴住居・水田を、古墳時代では堅穴住居・掘立柱建物・埴輪窯・水田を検出した。奈良時代の遺構は、前半と後半に分けられ、遺構の主軸方向を大きく変えている。前半はほぼ南北方向に主軸をとっており、堅穴住居・掘立柱建物・水田を検出した。後半は主軸を約四五度変え、古代の山陽道と同じ方位をとる掘立柱建物や水田を検出した。今回の調査で奈良時代を通して一〇〇棟以上の掘立柱建物を確認した。総柱建物が数棟あるが、大半は側柱建物であり、その多くは二間×三間である。本遺跡ではその後平安時代中頃前後に生活痕跡が中断し、後期から再度居住が始まり、掘立柱建物・水田が確認されるようになる。

木簡は、奈良時代の遺跡中心部分である西側の低地から四点出土した。奈良時代後半には五六m四方の溝に囲まれた中心地域の西側が段丘面になっており、二m前後の段差がある。木簡はすべて奈良時代後半の層からの出土で、相伴遺物には墨書土器・土馬・軒平瓦(播磨国府系瓦)・斎串などがある。隣接地からは、和同開珎・円面硯・稜枕も出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) [急々如□□]

290×33×5 032



(2) [V□□□] 288×32×5 032

(3) [□□□] (602)×37×9 059

(4) ・「順礼□□□」

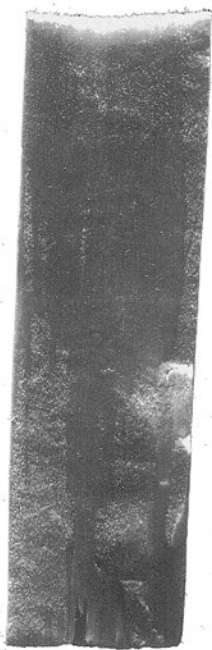
・「□□□」 107×31×3 011

(1)(2)はほぼ同種同形のもので、板目材で頭部は丸く、左右に切り込みを入れている。基部は直線ではなく、両側から削り尖らそうとしているが先端は直線である。墨痕が残っているだけで、保存状態は悪い。(1)は「急々如律令」と記されていたとみられ、同形同大の(2)とともに、呪符であろう。(3)は板材で丁寧な作りではなく、平坦でなく曲がつており、下端は尖らせている。長大な木簡であるが、判読できない。(4)は短冊型で薄く丁寧な作りである。板目材で表裏両面に墨痕が認められるが、内容は不明である。

9 関係文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成一六年度年報』(二〇〇五年)

(渡辺 昇)



(4) 赤外線斜光撮影

(1)

(2)

(3)